都市集合住宅居住の自立高齢者における「個」を中心とした住まい方の変容過程

シルバーステージからみた高齢期の居住環境に関する研究 その1

THE TRANSITION PROCESS OF LIVING ACTIVITIES OF THE ELDERLY LIVING
IN URBAN HOUSING COMPLEX, FOCUSING ON INDIVIDUAL LIFE STYLE

A study on the living environment of the elderly from the view point of the stage of their ages Part 1

番場 美恵子*, 竹田 喜美子**

Mieko BAMBA and Kimiko TAKEDA

The purpose of this study is, as the elderly living in urban housing complex is the subject of this study, to reveal the change of their living activities and the process of transition.

As a conclusion, not only the *ko*(=individual life style) is expanded in the elderly period, but also it observed the change of their *ko* centered living activities. As they get more older, the identity is established and *ko* becomes the center of their lives. The important thing is actively inviting *kyaku*(=the guests to their lives) and having a balance between *ko* and *kyaku* in their lives.

Keywords: *The elderly, Living activities, The stage of elderly, Way of living, Living in urban, Housing complex*

高齢者, 住まい方, シルバーステージ, 生活行為, 都市居住, 集合住宅

1. はじめに

1-1 研究の背景・目的

急激な高齢社会を迎えた背景には、高齢人口比率の上昇と絶対量的な高齢人口の増加が認められる。国立社会保障・人口問題研究所によると、2005年には65歳以上の人口は2,500万人以上（高齢化率は19.9%）になるという¹⁾。とくに高度経済成長期に地方から都市圏に移動した人口規模の大きい集団が徐々に高齢期を迎えていることから、今後、都市圏の高齢者人口の伸びは全国平均より大きくなると見込まれている。この層は、集合住宅に居住している世帯が多い。今から30～40年前、住宅双六の通過点と考えられてきた集合住宅は、経済状況や住宅観の変化によって、現在、終の棲家として選択されている。集合住宅に居住し高齢期を迎えた最初の世代が都市圏に集中しているのである。

一方、高齢者の意識も変化している。社会学や老年心理学でも、「新しい高齢者像」として高齢者の新しいライフスタイルや考え方を追求しているものがみられる²⁾。また、最近の高齢者の世帯構成でみられる夫婦家族や単身世帯の比率の上昇は、年をとっても子と同居しない高齢者の増加を示す。そしてこれらは都市の集合住宅居住者において顕著である。また、元気に自立して生活している人が多い。実際、要介護高齢者は、全高齢者の1割程度で、残りは自立可

能である。これまでとは異なる意識を持った、都市集合住宅に居住する自立した高齢者は、今後、団塊世代が高齢期を迎えることから、人口的なボリュームがさらに膨らむと思われる。

ところで近年、高齢者施設の研究では、施設の住宅化や居住性の重視³⁾、あるいは住宅の施設化⁴⁾といった検討がなされている。施設に住宅の居住性を反映させるためにも、在宅時間が長くなる高齢者が、住戸内でどのような生活を展開しているかを把握することは重要である。さらに、高齢期になると、退職などによりこれまでとは対人関係が変化することから、居住様態も変化と思われる。そこで、高齢期の生活実態に合わせて生活行為の領域を再分類し、住まい方を把握する必要がある。

また、厚生労働省が発表した平成15年（2003年）の日本の平均寿命は、男性が78.36歳、女性が85.33歳で、戦後以降年々伸び続けている⁵⁾。高齢になると、老化現象による身体的・精神的変化、退職などによる社会的・環境の変化が起こるが、その生活は定年を迎える60歳頃から変化しており、各年代によって状況も異なる。つまり長期化する高齢期を段階的に捉え、変化の移行を把握することが肝要である。

以上から、本研究は、都市の集合住宅に居住する自立高齢者を対象に、長期化する高齢期をステージごとに分類し、住まい方の変化

* 昭和女子大学生活科学部生活環境学科 助手

** 昭和女子大学生活科学部生活環境学科 教授・学博

Assistant, Dept. Environmental Design, Faculty of Living Science, Showa Women's University

Prof., Dept. Environmental Design, Faculty of Living Science, Showa Women's University, Ph. D.

とその変容過程を、事例を通して明らかにすることにより、高齢期の住まい方の実態に対応した住宅計画に示唆を与えることを目的とする。

1-2 既往研究と本研究の位置付け

高齢者に関する研究としては、要介護高齢者を対象としたものが多く、施設に関するもの、住宅改善に関するものなどがある。また、介護を必要としない、比較的元気な高齢者を対象とした研究としては、高齢者の近隣交流や活動に関するもの、親子の居住形態に関するものなどがみられるが、自立した高齢者の住まい方に関する研究は少ない。本研究に緊密に関連するものとしては、古賀・高橋(1997)⁶⁾による一人暮らしの高齢者を対象に常座から住まい方を捉えたものの、増永・富樫ら(2002)⁷⁾による集合住宅居住の単身高齢者を対象に住戸内の生活行為をみたもの、沢田ら(2001・2002)^{8)・9)}による熟年・高齢期のライフスタイルと住まい方をみたものがある。古賀・高橋は、高齢者の生活行為を、室ではなく居住者の認知する「場」との対応から捉えているという点で興味深い。しかし対象を一人暮らしの高齢者としていることと、生活行為を捉える視点が本研究とは異なる。増永・富樫らは、公団賃貸住宅居住の単身高齢者を対象とし、住戸内での生活行為と居室空間の対応関係の実態を明らかにしている。しかし、分析結果が特定の調査対象の結果に留まり、一般化されたとは言えない。最後に沢田らは、高齢者を自立可能なステージである「熟年期」と自立困難なステージの「高齢期」として、対象のライフスタイルと住まい方の特徴をみており、本研究にもっとも類似している。しかし、「退職して間もない心身ともに元気な夫婦ふたり暮らしのライフスタイル」像は明確化されているものの、調査対象は中年以降が中心で高齢者の調査実数自体は少なく、熟年以降の高齢期の変容過程までは強く言及していない。

本研究は、加齢による生活の変化を詳細に把握することと、生活行為を高齢期の生活に即して再分類してみることが特徴である。

2. 研究の概要

2-1 研究方法

調査の結果から、生活行為を再分類し、個人の行為である「個」を中心に、シルバーステージという視点から住まい方の変容過程を把握する。シルバーステージ及び生活行為は以下のように定義する。

(1) シルバーステージ

高齢期の変容過程を詳細に把握するために、60歳から年齢を5歳ごとに区切り、60～64歳をstage1、65～69歳をstage2、70～74歳をstage3、75～79歳をstage4、80歳以上をstage5とする。これを総称して「シルバーステージ」とする。当然、個人によって年齢観は異なることが予測されるが、加齢に伴う住まい方の変容過程についての一般化を試みる。

(2) 生活行為

高齢期になると余暇時間と在宅時間が拡大することから、人と接する頻度と、独りの時間が変化すると考えられる。そこで、生活行為を再分類する基準として、他人と接する行為(＝他人)、家族

領域	公 ←————→ 私									
対人軸	他人		家族				個人			
行為項目	客 応 対	宿 泊	食 事	談 話	テ レ ビ	休 息	読 書	趣 味	就 寝	
生活行為	接客		食事	くつろぎ				趣味	就寝	
高齢期の生活行為の領域	客		共				個		寝	

図1 高齢期の生活行為の分類

と接する行為(＝家族)、個人行為(＝個人)という3つの行為を設定し、これを「対人軸」とする。また、主要生活行為として「接客」「食事」「くつろぎ」「趣味」「就寝」を取り上げ、行為と対人軸との関係から、高齢期の生活行為の領域として「客」「共」「個」「寝」の4つに分類する(図1)。「接客」は他人または別居の家族と接することで、「客」とする。食事は家族と接することで、「共」とする。食事は人間の基本的な欲求行為であり、他の人々と一緒に食べる(共食)ことが原則となっている¹⁰⁾。単身の場合も、ほとんどの住戸で入居時には家族がおり、家族と一緒に食事をしていた延長線上に現在があるということから、単身の食事であっても「共」とする。「くつろぎ」は、家族でする行為と個人でする行為とに区別し、家族でするものは「共」に、個人でするものは「個」とする。「趣味」は個人でするものと考え「個」とする。「就寝」も個人ですが、起きて活動しているものと区別するため「寝」とする。高齢期の生活は、「個人がどのように過ごすか」という点が重要視され、「個」が拡大することが推察される。

2-2 調査概要

(1) 調査方法

訪問調査により、生活行為が行われる室の把握、居室の使われ方、日常生活などについて、アンケート及びヒアリング、図面採集、写真撮影を行った。住まい方とは個人によって多様に展開されており、それぞれの事情や条件によって変化が現れるため、量より質に重きを置く手法が一般的である。本研究でも質に重点をおき、事例を通してみていくことにより、高齢期の住まい方の本質を探ろうとするものである。なお、住宅規模による住まい方の比較をするために、規模の異なる3つの団地を対象に調査を行った。

(2) 調査対象

調査対象は、築後年数が30年以上経過した集合住宅3団地で、そこに居住する60歳以上¹¹⁾の高齢者である(表1)。所在地はいずれも神奈川県川崎市で、首都圏に勤務するサラリーマン世帯が多く、現在は退職しているという、都市圏の典型的な街のひとつであると捉えることができる。各団地の世帯数は550～1000世帯で、大規模団地に属する。対象団地の1戸あたりの床面積は32(2DK)～102(3LDK)㎡で、団地によって住宅規模が異なる(図2)。いずれも老朽化が進みつつある団地で、建替えに関する関心が高まっている。階段室型の3～5階建てでエレベーターは設置されていない。各団

表1 対象団地の概要

団地名	G団地	S団地	A団地
供給形態	民間 分譲	公社 分譲	公営 賃貸
棟数	55棟	16棟	23棟
階数	5階建	5階建	3～5階建
全世帯数	1000世帯	550世帯	600世帯
プランタイプ及び居住面積	2LDK※:75㎡ 3LDK :75・102㎡	2LDK※:50㎡ 3DK :50㎡	2DK :32㎡ 3DK :36㎡
アンケート調査数	303戸	156戸	101戸
訪問調査数	46戸	39戸	67戸
調査年	2001年	2002年	2003年
共通事項	・神奈川県川崎市に所在 ・築後30年超の集合住宅団地 ・アクセス形式が階段室型 ・エレベーターがない ・長期居住者が多く、高齢化率が高い		

※2LDKは3LDKまたは3DKを居住者が改造

図2 各団地の主なプラン

地とも高齢者のいる世帯は全体の3割以上である。そのうち、アンケート調査・訪問調査を行った住戸は合わせて560戸と高齢者世帯全体の半数以上に当たるが、本稿では、具体的な住まい方をみていくことから、訪問調査を行った152戸を対象とする。なお、調査年は2001～2003年である。

(3) 基本属性

対象住戸は、G団地46戸、S団地39戸、A団地67戸の計152戸である。世帯主年齢は60～96歳で、平均72.1歳である。シルバーステージでみると、stage1が30戸、stage2が30戸、stage3が34戸、stage4が35戸、stage5が23戸である¹²⁾ (表2)。家族構成は「夫婦のみ」が70戸(46.1%)と約半数を占め、次いで「単身」38戸(25.0%)、「夫婦+子」24戸(15.8%)、「単身+子」15戸(9.9%)、その他5戸(3.3%)と続く(表3)。家族人数は1～5人で、平均は2.0人である。平均居住年数は22.8年で、25年以上居住している住戸が61.8%と多勢を占める。

3. シルバーステージ

3-1 シルバーステージからみた身体状況および生活意識

老化の進行具合には多少の個人差があるものの、60歳代になると日頃よく運動している人でも体力の低下が早まり、70歳以降はその傾向がより顕著になるといわれる。加齢には大きく3つの要因がある。体力の低下などの身体的要因、気力の減退などの精神的要因、退職や家庭内役割の交代などの社会的・環境的要因である。これらが複雑に入り組んで老化の症状が現れるが、年齢の上昇に伴い徐々に変化する。筆者らが、G団地において生活意識や団地内の近隣交流に関するアンケートおよびヒアリングを行い、シルバーステージ別の生活意識と地域活動の現状等の傾向をまとめたものがある¹³⁾。調査対象は224世帯361名であるが、これによると、生活意識の傾向はstage1,2とstage3とstage4,5の3段階に分かれる。stage1,2では、自身が高齢者であるという自覚は少なく、「老後」を先のものとして捉えている。自分の楽しみのために趣味や活動をし、それが生きがいになっている。stage3になると、高齢期を自覚しはじめる、体力に自信がなくなる、など変化が現れる時期になる。生活意識や活動の状況が二極化する。stage4,5では、実際に身体に何らかの不具合を感じる人が

表2 団地別シルバーステージの分布

		stage1 (60～64歳)	stage2 (65～69歳)	stage3 (70～74歳)	stage4 (75～79歳)	stage5 (80歳以上)
計	152戸	30	30	34	35	23
		19.7%	19.7%	22.4%	23.0%	15.1%
G団地	46戸	6	7	10	15	8
		13.0%	15.2%	21.7%	32.6%	17.4%
S団地	39戸	14	6	7	8	4
		35.9%	15.4%	17.9%	20.5%	10.3%
A団地	67戸	10	17	17	12	11
		14.9%	25.4%	25.4%	17.9%	16.4%

表3 団地別家族構成の分布

		夫婦+子	夫婦のみ	単身	単身+子	その他
計	152戸	24	70	38	15	5
		15.8%	46.1%	25.0%	9.9%	3.3%
G団地	46戸	8	27	6	2	3
		17.4%	58.7%	13.0%	4.3%	6.5%
S団地	39戸	7	20	7	5	1
		17.9%	51.3%	17.9%	12.8%	2.6%
A団地	67戸	9	24	25	8	1
		13.4%	35.8%	37.3%	11.9%	1.5%

増え、不安や不自由さを現実問題として捉えるようになり、自分以外の人間に依存する意識を持つようになる。以上のように、シルバーステージによる変化が明らかになったが、本論文では、住まい方に関して、同様の視点で分析を進める。

3-2 シルバーステージと家族構成の関係

高齢期に主流を占める家族構成は「夫婦+子」「夫婦のみ」「単身」「単身+子」であるが、ステージによってその割合が異なる。(表4)。

stage1では「夫婦+子」と「夫婦のみ」が半々で多い。stage2では「夫婦のみ」が全体の半数を占め、stage3では「夫婦のみ」のほかに「単身」や「単身+子」が多くなる。stage4はstage3とほぼ同様で、stage5になると、「単身」がさらに増え、「夫婦のみ」は減少する。これらから変化の移行を捉えると、「夫婦+子」→「夫婦のみ」→「単身」の変化が主流で、配偶者が亡くなり「夫婦+子」→「単身+子」→「単身」になる場合や、単身のあと子どもと同居する「単身」→「単身+子」などがある。「夫婦+子」はstage1～2でみられ、「夫婦のみ」はstage2～4、「単身」と「単身+子」はstage3～5で多くみられる。これらから、ステージによって家族構成がある程度規定できることがわかる。

4. 高齢期の住まい方

4-1 一室における生活行為の組み合わせ

各居室で行われる行為を「客」「共」「個」「寝」で表し、組み合わせのパターンをみる。なお、とくに何の行為も行われない場合は、収納空間になっている場合が多いので、「納」とする。対象の居室はキッチン機能のみの室および高齢者以外の家族の個室を除外した計483室で、組み合わせパターンは18種類に及ぶ。また、行為は日常的に行われているものと、たまにしか行われないものがあるため、前者(主に行われる行為)のみの組み合わせについてみる(図3)。各行為の合計は「客」が5室、「共」が183室、「個」が172室、「寝」が191室である。「客」行為は日常的ではないことと、実際に来客はめったにないという住戸が多いため数は僅少であるが、他はほぼ同数である。次に、各居室において1つの行為が単独で行われるのか、あるいはいくつかの行為が複合して行われるのかという点に着目すると、「共」は半々、「個」は複合、「寝」は単独の割合が高い(「客」は少数なので省く)(図4)。「個」は他の行為とさまざまな複合し、バリエーションが豊富である。つまり、「個」の行為を中心にみることにより、高齢期の住まい方の特徴が浮き彫りになると思われる。

4-2 「個」行為の内訳

「個」はどのような行為であるのかを具体的にみると、テレビをみる、読書をするという回答が多く、他に女性では刺繍、編物、パッチワークなどの手芸、男性ではパソコンや碁などが目立つ。ヒアリング

表4 シルバーステージ別家族構成の分布

		夫婦+子	夫婦のみ	単身	単身+子	その他
	152戸	24	70	38	15	5
		15.8%	46.1%	25.0%	9.9%	3.3%
stage1	30戸	11	12	4	3	0
		36.7%	40.0%	13.3%	10.0%	0.0%
stage2	30戸	8	16	5	1	0
		26.7%	53.3%	16.7%	3.3%	0.0%
stage3	34戸	2	17	9	6	0
		5.9%	50.0%	26.5%	17.6%	0.0%
stage4	35戸	1	18	10	3	3
		2.9%	51.4%	28.6%	8.6%	8.6%
stage5	23戸	2	7	10	2	2
		8.7%	30.4%	43.5%	8.7%	8.7%

から、テレビは見たい番組をあらかじめ調べて見たり、新聞は時間をかけて隅から隅まで読むなど、余暇時間の多い高齢者特有の行為が確認できた。また、ラジオを聞くという回答の中で、「ラジオは何かしながら聞くもの、テレビはテレビに集中する」という意見が聞かれた。「個」の内容としては、大きく「趣味」と「くつろぎ」にわけられるが、高齢期ではテレビ、新聞、読書などが、「くつろぎ」ではなく、「趣味」と「くつろぎ」の中間の行為と捉えることができ、この中間的な行為が多い。一方、住戸内で趣味を展開している様子も伺える。心理学の中では、「最近の高齢者は、自分のこれからの生き方を自分で選択し、自己実現をはかることが重要である」とある¹⁴⁾。自己実現をはかることのひとつに趣味の充実があげられると思うが、趣味の活動範囲について、年齢別に触れる。なお、以下では世帯ではなく個人でみていくため、夫婦の場合もそれぞれカウントし、対象は247人（男性104人女性143人）となる。趣味の有無をみると、「あり」が6割、「なし」が4割であるが、stage5で「なし」の割合が急増する（63.0%）（図5）。さらに「あり」の中での活動範囲を「住戸外のみで活動」「住戸外と住戸内両方で活動」「住戸内のみで活動」の3つに分類し、傾向をみると、「外のみ」はstage1が、「外と内両方」はstage1からstage3までが多い。そして「内のみ」はstage3から増加する。つまり、stage3で外から内へ活動範囲が転換するといえる。

4-3 「個」を中心とした生活行為の展開

就寝以外でもっとも長く滞在する室をみると、いずれも「個」の行為が行われていることが確認できる。そこで、この室で「個」の行為が中心に行われると考え、この室における生活行為の組み合わせ

順位	生活行為	室数
1	寝	124
2	共	90
3	納	77
4	共 個	61
5	個	52
6	個 寝	35
7	共 個 寝	24
8	共 寝	8
9	客	5

その他7室

図3 一室における生活行為の組み合わせ

図4 各行為の単独・複合の割合

図5 シルバーステージ別 趣味の有無と範囲

図6 長く滞在する室における個タイプの割合

わせからタイプを分類する（＝以下「個タイプ」と称する）。タイプは「共個」「個寝」「個」「共個寝」の4つで、「共個」型が7割弱と圧倒的に多く、次いで「共個寝」型が2割、残りが「個寝」型、「個」型となる（図6）。「共個」型は、自室は持たず、個が食事やだんらんと同一のタイプ、「個寝」型はふだん滞在する室と寝室が同一で、自室を持っているタイプ、「個」型は寝室以外に自室を持っているタイプ、「共個寝」型は一室ですべての行為を行うタイプである。

住まい方は、住宅規模や家族人数による影響が大きいと思われるため、居住面積別と家族構成別に、前述の個タイプを中心に住まい方の傾向をみる。居住面積別では、団地によって居住規模を分け、面積が大きい順に、G団地（75㎡）、S団地（50㎡）、A団地（34㎡）とする。傾向としては、A団地における「共個寝」タイプの割合が高い。（19.8%）（図7）。室面積や室数が少ないことにより、すべての行為が同一の室で行われやすくなるといえる。次に家族構成別では、夫婦+子と単身+子で「共個寝」タイプの割合が高い（29.2%、40.0%）（図8）。これは家族人数と室数が関係し、子が1室を個室として確保するため、居室の余数が減少することから、高齢者の過ごす室が1室に集約される。また、夫婦のみで「個寝」タイプと「個」タイプの割合が増えるが（10.7%、6.4%）、いずれも自室を所有するタイプである。

4-4 住まい方の事例

各タイプの住まい方の特徴を、事例をあげて解説する（図9）。

①「共個」型：個が食事やだんらんと同一の室で行われ、就寝は別室になる。個室を持つ余室がない夫婦+子、室数には余裕があり個室を持つ必要のない単身、といった家族像が浮かび上がる。夫婦+子が多いstage1や単身が多いstage4で比較的多くみられる。

図7 床面積別 個タイプの割合

図8 家族構成別 個タイプの割合

【事例1】S団地S宅 (2LDK・50㎡・夫婦＋子・stage1) ふだん滞在する室は夫婦ともLDKで、この室では接客、だんらん、くつろぎ、趣味などが行われている。寝室は隣室で夫婦同室である。もう1室は娘の個室になっている。

②「個寝」型：個と寝が同室で、いわゆる子どもの個室と同じような室を確保する。自室を持つことにより、自己実現の現われ(＝アイデンティティの確立)と捉えることができる。子どもが独立して余った室を自室にするパターンが目立つ。また、性別では15件のうち男性が11件と圧倒的に多い。夫婦のみが増えるstage2での割合が高い。

【事例2】S団地Y宅 (3DK・50㎡・夫婦のみ・stage2)：夫がふだん滞在する室は玄関脇の独立和室4.5帖で、ここでは夫のくつろぎと就寝が行われており、夫の自室になっている。妻はDKで過ごすことが多く、家にも夫婦が同じ室にいることは少ない。

③「個」型：寝室以外に自室を保有しているタイプで、住宅規模が大きい場合にみられる。また、夫婦のみで夫婦寝室が同室の場合にもみられる。stage4でやや多い。

【事例3】G団地O宅 (3LDK・75㎡・夫婦のみ・stage4)：ふだん滞在する室は、妻は玄関脇の独立和室6帖で、ここでくつろいだり、趣味の洋裁をしている。夫は8帖リビングにすることが多い。寝室は夫婦同室で、リビング隣の6帖にベッドを置いている。

④「共個寝」型：一室ですべてを行うタイプで、住宅規模が小さい場合に多くみられる。夫婦のうち夫が自室を持ち、妻がこのタイプになる場合や、単身の気軽さと億劫さから寝が中心の生活になる場合などがある。

【事例4】A団地K宅 (2DK・32㎡・単身・stage5)：妻がふだん滞在する室は、DK隣の6帖で、ここでは接客、食事、くつろぎ、就寝などすべての行為が行われている。隣室の4.5帖は物があふれ、物置になっている。

シルバーステージと個タイプを単純に比較すると対応関係は低い。家族構成や居住面積などの要件を加味して傾向をみると、シルバーステージの上昇に伴い、「共個」→「個寝」「個」→「共個寝」という変化の移行が読み取れる。「個寝」や「個」は、割合は少ないものの、高齢期におけるアイデンティティが確立された住まい方として注目される。自室を持つことが、アイデンティティを誘発する要因となっていると考えられる。ただ、「個寝」は1日を通して滞在する室が固定してしまうため、閉じこもり状態になる恐れがある。

4-5 夫婦の住まい方の組み合わせ

次に、夫婦のみ(70戸)と夫婦＋子(24戸)を取り上げ、夫婦間での個タイプの組み合わせをみる。まず、昼間滞在する室(＝「個」

図9 個タイプ別住まい方事例

が行われる室)と寝室(＝「寝」が行われる室)との夫婦同別室の形態をみると、どちらの室も、夫婦同室の場合が約6割、別室の場合が約4割である。家族構成別では、夫婦のみのほうが、「個」「寝」とも別室になる割合が高い。また、夫婦のみでステージ別の傾向をみると、「個」はstage1では同室、stage2以降は別室の割合が高い。「寝」はstage1では同室、stage2,3は別室になり、stage4以降また同室の割合が増える。次に、「個」と「寝」の室の組み合わせをみると、「個同寝同」が38戸と最も多く(40.4%)、次いで「個別寝別」が23戸(24.5%)、「個同寝別」が18戸(19.1%)、「個別寝同」15戸(16.0%)となる(図10)。夫婦のみで「個別寝別」の割合が高い。夫婦＋子は、ステージが低いときに多くみられることから、有職の割合も高く、「個」が同室であっても、常に顔を合わせているというわけではない。また、個タイプを夫婦の組み合わせでみると、夫

揃揃って同じタイプになるというわけではなく、一方だけが自室を保有しているという場合も多く、各住戸によってその組み合わせは様々である。また、見たい番組が違うからという理由で、別々の室でテレビを見るという話も聞かれた。高齢期では、夫婦が住戸内で別々に行動していることが多いことが明らかになったが、これはそれぞれが自己を確立している(=自立)姿の現れと読み取ることができる。これまで夫婦は1単位で考えられてきたが、2単位で考える必要があることが伺える。

4-6「客」における交流の状況

高齢期の生活は自己実現の成就が自立に向け重要であると前述したが、自己は他者との関係で規定されるともいわれる¹⁰⁾。つまり、「個」を充実させるためには「客」も取り入れながら、バランスをとることが重要である。そこでまず交流の状況を把握する。交流の有無をみると、「あり」が9割、「なし」が1割であるが、「なし」の割合は、stage3からやや上昇する。次に、「あり」のなかでの交流範囲を、「住戸外のみで交流」「住戸外と住戸内両方で交流」「住戸内のみで交流」の3つに分類し、その傾向をみると、「外のみ」と「外と内両方」はステージが低いほど多く、ステージの上昇に伴い減少する(図11)。「内のみ」はstage3から徐々に増える。交流相手としては、

図10 夫婦間における個と寝の組み合わせ

図11 シルバーステージ別 交流の有無と範囲

外では趣味の仲間や近所の人が多く、家では子ども家族などの身内が圧倒的である。交流範囲もやはり stage3で変化するといえる。

4-7「客」を取り入れている事例

次に、住戸内での「客」行為について取り上げる。対象住戸のなかで「客」行為やその空間が比較的日常的に確認できるのは19戸(12.5%)、28室である。居住規模別では、G団地が12戸(63.2%)、家族構成別では、「夫婦のみ」が11戸(57.9%)、stage別では、stage4が10戸(52.6%)でそれぞれもっとも多い。内容から、接客タイプを3つに分類する。①お茶など習い事の教室として使用する場合(=教室タイプ)が9室(32.1%)、②別居の子どもの宿泊室として使用する場合(=宿泊タイプ)が6室(21.4%)、③ソファなどが置いてあり、応接間として空間がしつらえられている場合(=しつらえタイプ)が13室(46.4%)である。タイプ別の使用状況を、事例をあげて解説する(図12)。

①「教室」タイプ：週に何度か自宅でお茶を教えているという住戸が多い。2室を一体にして使用している場合が多く、開放的である。

【事例5】G団地T宅(3LDK・75㎡・夫婦のみ・stage4)妻が週に3日お茶を教えている。本格的な茶室にするため、もともと6帖の和室を8帖に拡大し、その分リビングを狭めた。リビングと茶室の

間を開放しているので、リビングにも客を通すようになっている。妻はふだんも茶室にすることが多く、夫はその他の室をその時々で使っている。

②「宿泊」タイプ：子どもや孫がきたときの宿泊用に室を用意している住戸が多い。しかし、頻度は高くはないの

図12 客タイプ別住まい方事例

で、ふだんは物置になっている場合が多く見受けられる。

【事例6】S団地K宅(3DK・50㎡・単身・stage4):子どもや孫が頻繁に遊びに来る。泊まる時は北側の和室に宿泊する。孫は毎日ごはんを食べにきて、いろんな室をまわって遊んでいる。本人はDK隣の6帖でくつろぐことが多く、ここで就寝もしている。

③「しつらえ」タイプ:住宅規模が比較的大きく、家族人数に対して余室がある場合に多くみられる。夫婦それぞれが自室に滞在し、本来だんらんの場となるリビングがそのまま客間となる場合と、比較的広くきれいにしているために、「共」兼「客」の空間になる場合とがある。

【事例7】G団地K宅(3LDK・75㎡・夫婦のみ・stage4):夫は独立和室6帖、妻はリビング隣室の6帖でそれぞれ「個寝」型の自室を持ち、リビングに応接セットが置いてある。実際の来客頻度は少なく、リビング自体の使用頻度が低いいためか、整然としている。

実際に接客が多い住戸は少数であるが、来客がある、またはその空間が確保されていることによって、空間をまんべんなく使用したり、きれいにしたりするというプラスの働きが作用する。

5. まとめ

本研究により明らかになった点は以下のとおりである。

①高齢期の家族構成の変遷は、夫婦+子→夫婦のみ→単身が主流となる。stage1では夫婦+子、stage2では夫婦のみ、stage3,4では夫婦のみと単身、stage5では単身が多い。

②趣味や交流の活動範囲はstage3を境に狭まる。stage3以降、住戸内にいる時間が長くなり、他者との交流も減少する。またstage5で趣味を持たない割合が上昇する。

③高齢期になると「個」が拡大するだけでなく、「個」を中心とした住まい方に変化がみられる。stage1では「個」が独立せず共の一部であるが、stage2~4では徐々にアイデンティティの確立が生まれ、「個」が独立するようになる。また、住戸内でも夫婦が別々に行動することが多い。stage5ではすべての行為が一室で行われるようになり、「寝」が中心の生活になる。

④実際に「客」が日常的に行われる住戸は少ない。しかし、「客」を頻繁に取り入れていたり、接客空間が確保されていると、空間および生活が活性化される。

以上の知見により、生活行為の優先すべき要素がシルバーステージによりstage1とstage2~4、stage5の3段階に分けられることが示唆される。stage1では、退職後の生活の変化に対応するために、「個」を確立することに加え、子どもと同居している世帯も多いので「共」も重視される。stage2~4ではアイデンティティの確立のための「個」の充実と、他者との関わりである「客」によってバランスをとることが重要である。stage5では心身の虚弱により「寝」が中心になるが、閉じこもりの状態を避けるためにも積極的に「客」を取り入れることが重要である。また、それぞれの行為を、室を移動して行うことにより、生活のけじめをつけることができると考える。住居計画への提案としては、「個」の拡大と縮小にあわせて、3室程度から1室まで変更可能な室の計画、行為によりある程度空間を分節する間取りの計画、「客」を導入するために、たとえば玄関ホールから直結する接客空間の確保などがあげられる。

<注釈>

- 1) 日本の将来推計人口(平成14年1月推計) 国立社会保障・人口問題研究所
- 2) 例えば参考文献1) など
- 3) 参考文献2) 参照
- 4) 参考文献3) 参照
- 5) 平成15年簡易生命表,厚生労働省大臣官房統計情報部人口動態・保健統計課 計析第一係
- 6) 参考文献4) 参照
- 7) 参考文献5) 参照
- 8) 参考文献6) 参照
- 9) 参考文献7) 参照
- 10) 参考文献8) 参照
- 11) 高齢者とは65歳以上を指すが、ここでは一般的に定年を迎え生活が一変するであろう60歳以上を「高齢期」と捉える
- 12) 世帯別のシルバーステージは夫の年齢を基準に設定し、夫がいない場合のみの妻の年齢を該当するステージに当てはめた
- 13) 参考文献9) 参照
- 14) 参考文献10) 参照
- 15) ここでの「仕事」は、会社からの持ち帰りの仕事、自治会等の仕事、自宅で習い事を教えるなどが当てはまり、生活行為の分類としては「個」に該当する
- 16) 参考文献11) 参照

<参考文献>

- 1) 森岡清志, 小林一樹編「変容する高齢者像—大都市高齢者のライフスタイル—」東京都立大学出版会, 1994
- 2) 大原一興「高齢者介護・居住施設の動向—高齢者施設の脱「近代」—」ベース設計資料No.115, 建設工業調査会, 2002.12
- 3) 塚礼子「新たなパラダイム下の高齢社会のデザイン」日本建築学会建築雑誌vol.118, 特集「高齢社会のデザイン」, pp14・15, 2003.10
- 4) 古賀紀江, 高橋鷹志「一人暮らしの高齢者の常座をめぐる考察 高齢者の住居における居場所に関する研究その1」日本建築学会計画系論文集第494号, pp97-104, 1997.4
- 5) 増永理彦, 米原慶子, 富樫類「公団賃貸住宅における単身高齢者の住戸内生活行為に関する研究」日本建築学会計画系論文集第551号, pp259-265, 2002.1
- 6) 沢田知子「熟年・高齢期におけるライフスタイルと住まい方の特徴 長寿社会におけるライフコースの充実・支援にむけた住宅計画その1」日本建築学会計画系論文集第547号, pp95-102, 2001.9
- 7) 沢田知子, 渡辺秀俊, 谷口久美子, 丸茂みゆき「熟年・高齢期におけるライフワーク・人間関係・生き甲斐等に関する考察 長寿社会におけるライフコースの充実・支援にむけた住宅計画その2」日本建築学会計画系論文集第562号, pp135-142, 2002.12
- 8) 石毛直道編「人間・たべもの・文化—食のシンポジウム80」平凡社, 1980
- 9) 番場美恵子, 竹田喜美子「シルバーステージからみた高齢者の近隣交流に関する研究 集合住宅団地GHにおけるケーススタディ」日本家政学会誌Vol.54 NO.6, pp491-499, 2003.6
- 10) 南博文, やまだようこ編「老いることの意味—中年・老年期」講座生涯発達心理学第5巻, 金子書房, 1995
- 11) 正高信男著「老いはこうしてつくられる ところとからだの加齢変化」中公新書, 2000
- 12) 番場美恵子, 竹田喜美子他「在宅高齢者住宅における高齢者と家族の住生活に関する研究その3~7」日本建築学会大会梗概集, 2002~2004

(2004年10月10日原稿受理, 2005年3月2日採用決定)